

漢字の書き取りテスト及び漢字力の意識調査による 漢字力向上への介入効果

徳永佐枝子*・長幡友実*・芳野憲司*・小池亜紀子*・古橋啓子*・兼平奈奈*

1. はじめに

管理栄養士養成課程の学生にとって臨地・校外実習（以下：臨地実習）は、実践活動の場での課題発見、解決を通して、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識及び技能を習得できる機会である（日本栄養士会, 2014）。そのような貴重な実習を有意義なものにするためには、学生は管理栄養士としての必要な知識の取得だけでなく「身だしなみ」「挨拶・言葉遣い」「時間厳守・規則厳守」など実習生としての心構えを十分に理解した上で臨地実習に臨まなければならない。学生は、臨地実習で体験した各分野の管理栄養士の業務を通して将来の仕事のイメージを明確化し、勉学に励み社会人として活躍する人材を目指してほしい。そのためには、実習先の指導担当者との信頼関係が構築出来るように十分な事前学習が必要である。しかし、実習に臨む心構えに対する学生の自己評価より実習施設からの評価が低いという報告（葛城, 2017）もあり、大学ではきめ細やかな指導が必要である。

実習中は、実践の場で見たり聞いたりした体験からの学びや気づきを実習ノートに記録することが求められる。それらの記録をもとに指導担当者から指導を受けることで管理栄養士としての実践能力の基盤である文章力・読解力・表現力が磨かれ学びが深まる。しかし、大学1年生による誤字の記載は56.5%、基本的な作文ルール違反44.9%という報告（塚本, 2007）があり、文字を書くことや辞書や本などで調べる機会が減少している現代において言語能力の低下が懸念される。本学の学生においても、実習ノートの記録に関して誤字・脱字・癖字だけでなく、基本的な形式的叙述に反した内容を記録する学生が散見され、実習で求められる言語能力レベルとの間に乖離が見られる。

例年、実習先の指導担当者から実習ノートの誤字、脱字の多さを指摘する声が多く上がっており、言語能力を向上させる取り組みの必要性を感じていた。そこで、今回、臨地実習の事前・事後指導に関する科目である「栄養総合演習Ⅰ」において、書く力に着目した取り組みを行った。教育介入方法として、正しく文章を書く基本である誤字・脱字を減らすために漢字書き取りテスト及び学生の漢字力に関する意識調査を実施した。その結果をもとに漢字力についての意識の変化について検証したので報告する。

2. 研究方法

2-1. 漢字書き取りテスト及び漢字力の意識調査を実施した「栄養総合演習Ⅰ」の授業

2-1-1. 事前指導の内容

「栄養総合演習Ⅰ」（全15回）は2限続きの授業で、管理栄養士養成課程の臨地実習の事前・事後指導の必須科目で春学期から開始されており、2019年度は健康栄養学部3年生118名（男子10名、女子108名）を対象に開講された。本科目は、専任教員6名、学科助手2名、実習センター職員2名（繁忙期3名）が

* 東海学園大学健康栄養学部

実習の事前・事後指導を行うものである。15回の授業は、学生全員に一斉に行う指導（以下:全体指導）、実習分野ごとの指導（以下:分野別指導）、実習施設別に行う個別指導（以下:各施設指導）に分かれている。全体指導では臨地実習のオリエンテーションだけでなく、外部講師による「身だしなみ」「挨拶」「礼儀」のマナー講座、実習に臨む心構え、実習受け入れ施設からの要望などの講義を行っている。また、本学教育学部の教員による「臨地実習ノートの書き方」をテーマに臨地実習における言語能力や識字力のアップを目指した講義も取り入れている。学生たちは、「栄養総合演習Ⅰ」の授業で事前・事後指導を受講し6～7月を中心とした春学期、8～9月の夏休み、10～11月を中心とした秋学期の3回に分けて各施設での実習前オリエンテーションと臨地実習に臨む。そのため、「栄養総合演習Ⅰ」の授業出席状況は、学生の実習時期により大きく左右される。それらの事情を考慮して、実習開始前にあたる授業の前半に全体指導を行い、その後、分野別指導、各施設指導へと授業を組み立てている。大まかな「栄養総合演習Ⅰ」の授業内容を表1に示す。

表1 栄養総合演習Ⅰの授業内容

回	授業内容	
	1 限目	2 限目
1	全体指導（オリエンテーション） 1回目漢字書き取りテスト実施	全体指導（オリエンテーション）
2	全体指導（オリエンテーション）	分野別指導（保健所）
3	全体指導（オリエンテーション） 1回目テスト返却・指導	分野別指導（学校・事業所）
4	学外講師 マナー講座講師による講義・実技	学外講師 愛知県栄養士会会長より、臨地実習に臨む心構えについて講義
5	分野別指導（保健所） 2回目漢字書き取りテスト実施	学内講師（臨地実習ノートの書き方） 教育学部教員による講義
6	分野別指導（学校・事業所）	分野別指導（保健所）
7	全体指導・各施設指導	学外講師 実習先の立場から学生に臨むこと
8	全体指導・各施設指導	分野別指導（事業所）
9	全体指導・各施設指導	分野別指導（学校）
10	全体指導・各施設指導	分野別指導（学校）
11	全体指導・各施設指導	各施設指導
12	全体指導・各施設指導	各施設指導
13	全体指導・各施設指導	各施設指導
14	各施設実習報告会	各施設指導
15	各施設実習報告会	全体指導

2-1-2. 事後指導の内容

実習終了3日以内には、学生は指導担当教員から実習ノート・報告書・お礼状・実習報告のパワーポイント作成の指導を受ける。指導担当教員は、実習ノート、報告書の内容および誤字、脱字、癖字、文字の丁寧さ、話し言葉使用の有無などのチェックを行い、改善すべき点について学生へ指導を行う。このチェックを別の教員2名も同じように行い必要に応じて指導する。学生は、指導を通して文章力・読解力・表現力だけでなく自分の記録に関する癖について気づき次回の実習に向けて改善することが出来る。また、実習で学んだことや気づきをパワーポイントにまとめ、「栄養総合演習Ⅰ」の授業で発表する。パワーポイント作成においても、自分が学んだことを相手に分かりやすく伝えるためには文章力、構成力が、

発表ではプレゼンテーション力が必要であり、学生が試行錯誤しながら作成していく過程で言語能力が向上するよう支援を行っている。

2-1-3. 漢字書き取りテストの調査対象者と実施方法

漢字書き取りテストは、2019年度健康栄養学部3年生118名を対象とした。テスト問題は、病院・高齢者福祉施設・保健所・学校・事業所の実習ノート・報告書に記録する頻度の高い漢字50問を専任教員が作成した。全員の学生が出席する1回目（4月8日）の授業時に1回目の漢字テストを10分間で行った。なお漢字書き取りテストの実施に関しては学生に告知せずに行った。採点は、4年生のチューター・アシスタント8名が担当した。テスト終了後に、解答を配布し5回目（5月13日）の授業時に再テストを行うことを周知し自宅での自主学習を課した。

3回目（4月22日）の授業時に、1回目の漢字書き取りテストを返却し全体指導を行った。全体指導の内容は、1回目テストの最高点、平均点の告知および間違いの多かった正解率50%未満の漢字22問の説明を行い、自分が間違えた漢字を次回は間違わないように意識づけを行った。正解率50%未満の漢字22問は表2に示す。また、実習中に頻回に使用する漢字の中でも「師」と「士」の区別が曖昧であったとの学生からの所感が多くみられたため資料を作成し説明を行った。資料は表3に示す。

5回目の授業時に2回目の漢字書き取りテストを1回目と同様の方法で実施した。また、5回目の授業時にオリエンテーションのため欠席した3名は別日に漢字書き取りテストを実施した。

表2 1回目の漢字書き取りテストで正解率50%未満の漢字22問

正解率	正解	正解率	正解	正解率	正解
2.5	食札	29.7	的確	43.2	臨
2.5	胃瘻	31.4	厨房	44.9	誤嚥
7.6	食事箋	33.1	健康診査	45.8	白湯
7.6	挨拶	37.3	放射線技師	45.8	透析
10.2	褥瘡	39.8	検査技師	46.6	臨地実習
11.0	麻痺	41.5	嚥下	47.5	作業動線
16.1	胃潰瘍	41.5	講義		
27.1	箸	43.2	低残渣		

*太字は、病院・高齢者福祉施設で頻回に使用される漢字（14問）

表3 試験問題での「師」と「士」の区別

「師」を用いる漢字	「士」を用いる漢字
医師	管理栄養士
保健師	理学療法士
看護師	介護福祉士
薬剤師	
検査技師	
放射線技師	
調理師	

2-1-4. 漢字力の意識調査の調査対象者と実施方法

2019年度健康栄養学部3年生118名を対象とし、漢字書き取りテスト実施前後において計2回の自記式質問紙調査を行った。1回目（4月8日）の授業時に事前調査、15回目（7月22日）の授業時に事後調査

を行った。事前調査の調査票の内容は以下の通りである。①「漢字を読むことは得意ですか」に対し、「得意」「やや得意」「ふつう」「あまり得意でない」「苦手」から1つ選んでもらった。②「漢字を書くことは得意ですか」に対し、「得意」「やや得意」「ふつう」「あまり得意でない」「苦手」から1つ選んでもらった。③「漢字が分からない場合どのような行動をもっとも多く取りますか」に対し、「辞書、電子辞書、スマートフォン、パソコンで調べる」「身近な人に聞く」「ひらがなで書く」「漢字でわからないことはない」「その他」から1つ選んでもらった。④「マンガや雑誌を除く紙媒体の本や新聞を読むのは好きですか」に対し、「好き」「やや好き」「どちらでもない」「あまり好きでない」「好きではない」から1つ選んでもらった。⑤「2年次において、マンガや雑誌を除く紙媒体の本や新聞を1日に平均どのくらい読みましたか」に対し、「2時間以上」「1～2時間以内」「30分～1時間以内」「30分未満」「全く読んでない」から1つ選んでもらった。

事後調査の調査内容は以下の通りである。①～④は事前調査と同じ内容とした。⑤「栄養総合演習Ⅰの授業や臨地実習を通して、漢字を書くことに気をつけるようになりましたか」に対し、「かなり気をつけるようになった」「少し気をつけるようになった」「変化していない」「あまり気をつけていない」「全く気をつけていない」から1つ選んでもらった。⑥「栄養総合演習Ⅰの授業や臨地実習を通して、誤字・脱字の間違いが減り漢字力が向上しましたか」に対し、「向上した」「やや向上した」「変化なし」「やや低下した」「低下した」から1つ選んでもらった。

2-2. 倫理的配慮

1回目の漢字書き取りテストの結果は、成績に反映させないことを口頭で説明した。

2-3. 統計解析

回収したテストのデータは、エクセル統計を用いて単純集計で分析を行った。

3. 結果

3-1. 漢字書き取りテストの結果

1回目と2回目の漢字書き取りテストは、118名に実施し118名から回収した。図1に1回目と2回目の漢字書き取りテストの正解率を示す。表4に1回目と2回目の各漢字別の正解率、図2に1回目と2回目の漢字書き取りテストの所感を示す。

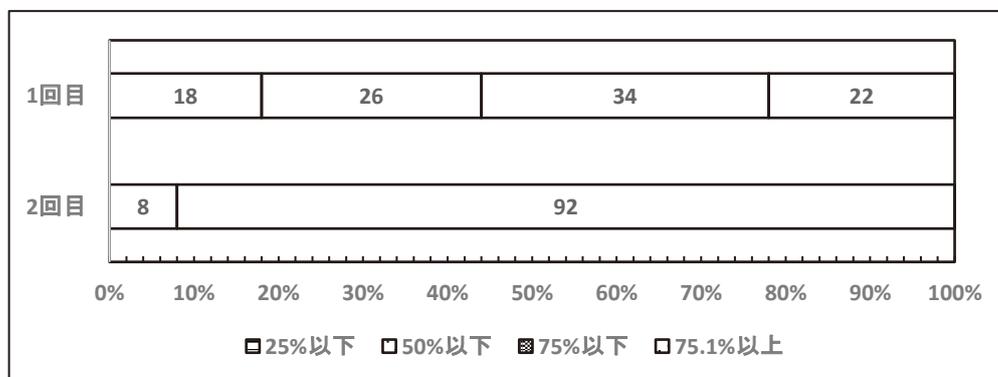


図1 1回目と2回目の漢字書き取りテストの正解率

1回目の50問の正解率は平均50%であったが、2回目の正解率は90%と大幅に上昇した。1回目は正解

率50%以下が22%を占め75%以上の正解率は22%であった。2回目は正解率50%以下が0%となり75%以上の正解率は92%であり、自宅での自主課題への取り組みの成果が見られた。表4の各漢字別の正解率を見ると、1回目と2回目の正解率が75%以上とほとんどの学生が間違わずに記載できた漢字は、「医師」「管理栄養士」「摂取」「理学療法士」「摂食障害」「食物繊維」「丁寧」「配膳」「専門」の9問であり、授業で頻回に使用している漢字であった。

1回目の正解率が25%以下であった漢字は、「褥瘡」「食事箋」「挨拶」「胃潰瘍」「食札」「麻痺」「胃瘻」の7問であった。7問中6問は、主に病院や高齢者福祉施設で使用されている漢字であり、授業等で学んでいても日常生活においては使用頻度の低い漢字であった。

表4 1回目と2回目の各漢字別の正解率

問	問題	正解率		問	問題	正解率	
		1回目	2回目			1回目	2回目
1	医師	88.1	99.2	26	丁寧	77.1	96.6
2	保健師	67.8	94.9	27	検討	55.1	89
3	看護師	61.0	95.8	28	摘出	54.2	96.6
4	委託	54.2	90.7	29	的確	29.7	86.4
5	管理栄養士	99.2	99.2	30	指摘	53.4	90.7
6	摂取(する)	89.8	100.0	31	胃潰瘍	16.1	69.5
7	薬剤師	65.3	94.1	32	低残渣	43.2	91.5
8	検査技師	39.8	89.0	33	厨房	31.4	86.4
9	放射線技師	37.3	90.7	34	食札	2.5	93.2
10	理学療法士	76.3	93.2	35	配膳	77.1	97.5
11	褥瘡	10.2	77.1	36	麻痺	11.0	74.6
12	白湯	45.8	97.5	37	茶碗	53.4	91.5
13	介護福祉士	63.6	94.9	38	専門	84.7	94.9
14	介護支援専門員	53.4	83.1	39	訪問	51.7	83.9
15	調理師	61.9	86.4	40	胃瘻	2.5	71.2
16	誤嚥	44.9	80.5	41	透析	45.8	93.2
17	嚥下	41.5	78.0	42	経腸栄養剤	73.7	97.5
18	喫食	78.8	99.2	43	展開	51.7	94.9
19	摂食障害	84.7	100.0	44	老人保健施設	56.8	99.2
20	食事箋	7.6	87.3	45	関心	53.4	96.6
21	全粥	56.8	94.9	46	臨(む)	43.2	98.3
22	箸	27.1	54.2	47	作業動線	47.5	90.7
23	食物繊維	88.1	98.3	48	経験	56.8	100.0
24	講義	41.5	94.1	49	臨地実習	46.6	99.2
25	挨拶	7.6	84.7	50	健康診査	33.1	95.8

表5 1回目と2回目の漢字書き取りテストに関する所感(抜粋)

＜1回目漢字書き取りテスト＞

- ・読みは出来るが書けない漢字が多くあった。(特に多数)
- ・自分では問題の漢字を理解しているつもりでいたが、思い出せなかった。
- ・病院等で使用される漢字が難しく書けなかった。
- ・携帯等の使用が多くなり、漢字変換をよく利用しているので漢字が書けなくなっていると思った。
- ・10分間では、全問記入出来なかった。

- ・漢字力が低下していると感じた。
- ・「師」と「士」の区別が曖昧であった。

《2回目漢字書き取りテスト》

- ・自宅で、何回も練習したのでだいぶ自信がついた。
- ・わからない漢字があれば調べる習慣をつけた。
- ・今までは、分からなければひらがなで書いていたが、漢字で書くように意識した。
- ・前は試験時間が不足したが、今回は時間内に出来たので練習が必要だと思った。
- ・自分で、「師」と「士」の区別をつけるノートなどを作って努力した。
- ・漢字を自宅で何回も練習したら、2回目はしっかりと正解を書くことが出来た。
また、忘れてしまうかもしれないので日頃から正しく漢字を書く、分からない場合は調べることが大切と実感した。

3-2. 漢字力の意識調査の事前調査、事後調査結果

事前、事後調査票は出席者118名に配布し、118名から返却された。図2に「漢字を読むことは得意ですか」についての結果を示した。「得意」「やや得意」を合わせた回答は事前35.6%、事後35.5%と変化は見られなかった。図3に「漢字を書くことは得意ですか」についての結果を示した。「得意」「やや得意」を合わせた回答は事前22.8%、事後20.3%であった。図4に「漢字がわからない場合、どのような行動を取りますか」についての結果を示した。辞書等で調べるとの回答は、事前86.5%、事後90.7%と教育介入後に増加していた。図5に「マンガや雑誌を除く紙媒体の本や新聞を読むのは好きですか」についての結果を示した。「好き」「やや好き」を合わせた回答は、事前45.8%、事後47.5%であった。

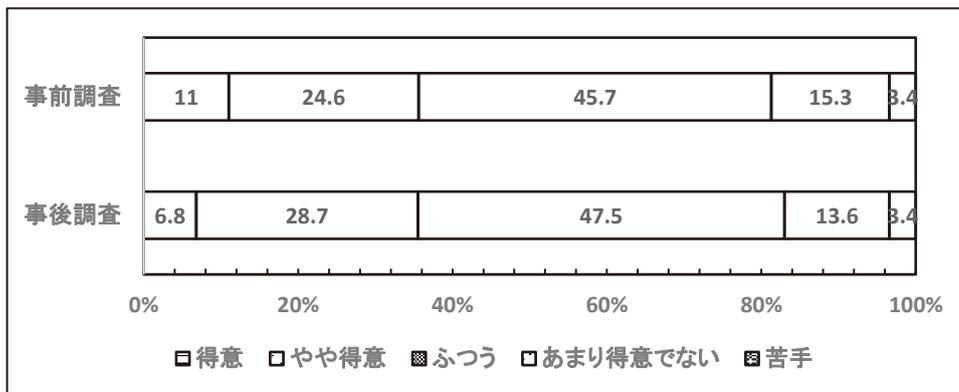


図2 漢字を読むことは得意ですか

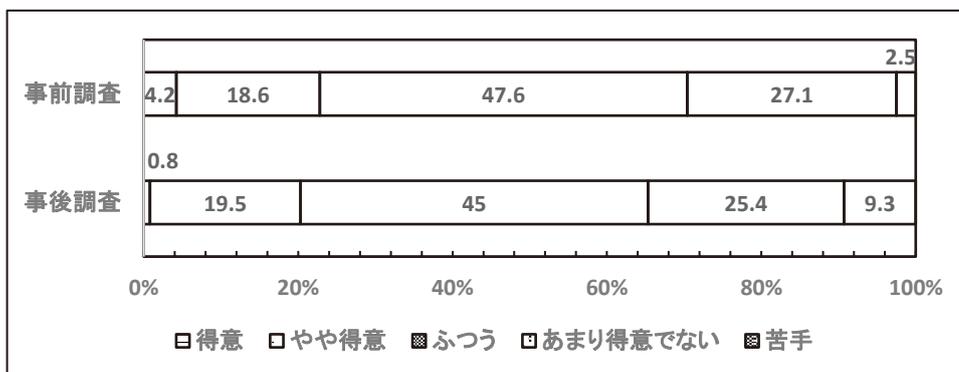


図3 漢字を書くことは得意ですか

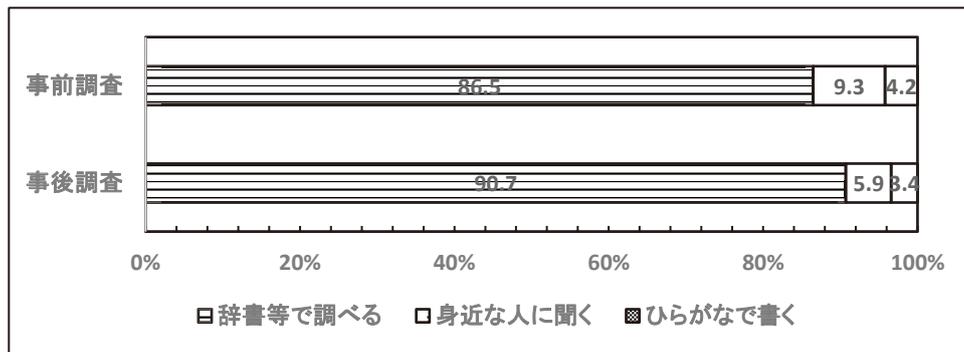


図4 漢字が分からない場合、どのような行動を取りますか

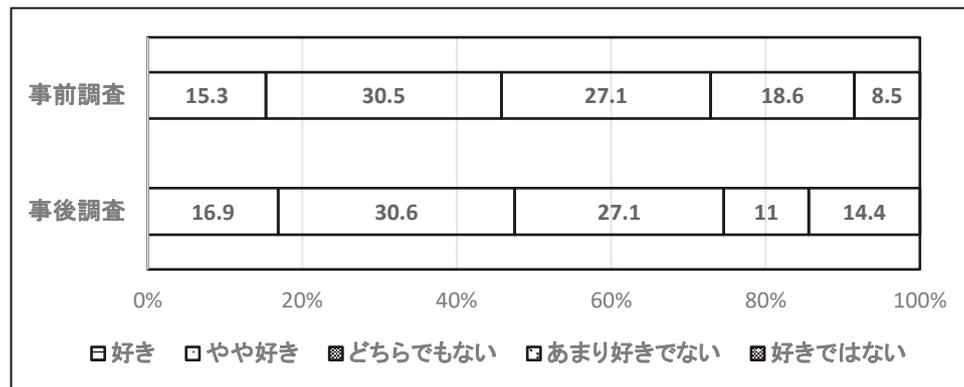


図5 マンガや雑誌を除く紙媒体の本や新聞を読むのは好きですか

図6に「2年次において、マンガや雑誌を除く紙媒体の本や新聞を1日に平均どのくらい読みましたか」についての結果を示した。「2時間以上」は0%、「1～2時間未満」は2.5%、「30分～1時間未満」は10.2%、「30分未満」が40.7%、「全く読んでいない」が46.6%であった。

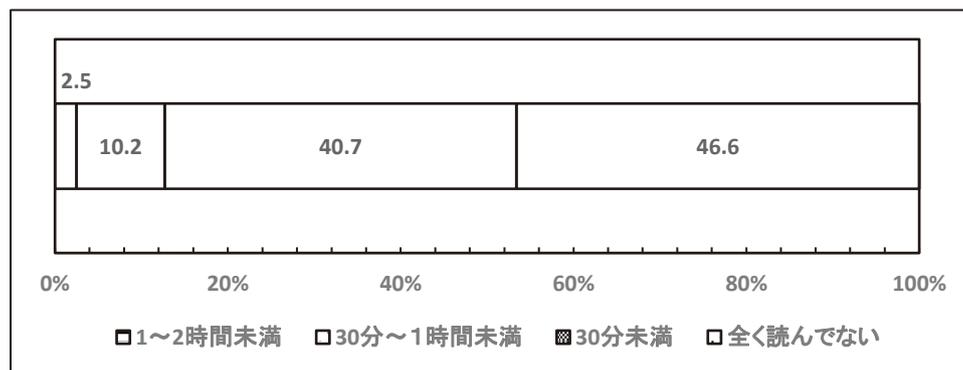


図6 「2年次において、マンガや雑誌を除く紙媒体の本や新聞を1日に平均どのくらい読みましたか」

図7に「栄養総合演習Ⅰの授業や臨地実習を通して、漢字を書くことに気をつけるようになりましたか」についての結果を示した。「変化していない」は5.1%、「少し気をつけるようになった」は69.6%、「かなり気をつけるようになった」は23.7%であった。「少し気をつけるようになった」と「かなり気をつけるようになった」を合わせると93.3%の学生に意識の変化が見られた。図8に「栄養総合演習の授業や臨地実習を通して、誤字・脱字の間違いが減り漢字力が向上しましたか」についての結果を示した。「向上した」が9.3%、「やや向上した」が72.9%、「変化なし」が17.8%であった。

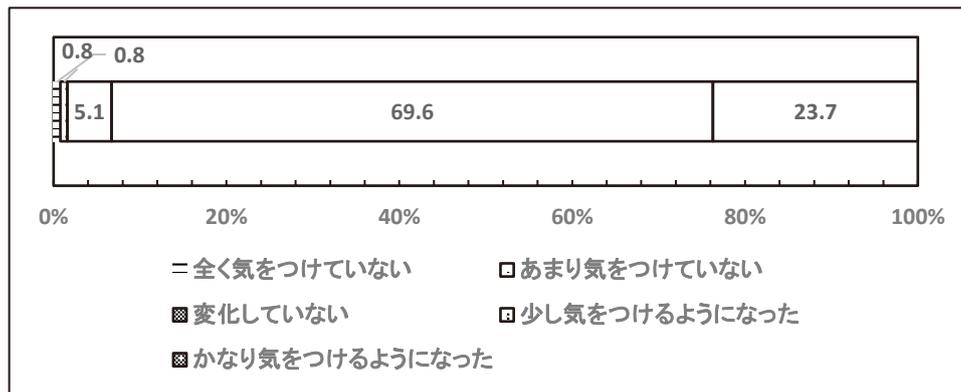


図7 「栄養総合演習Ⅰの授業や臨地実習を通して、漢字を書くことに気をつけるようになりましたか」

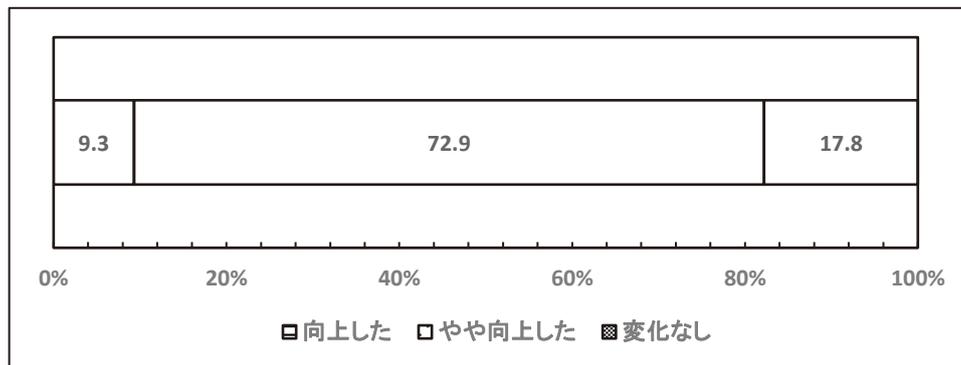


図8 「栄養総合演習の授業や臨地実習を通して、誤字・脱字等の間違いが減り漢字力が向上しましたか」

4. 考察

本研究では、「栄養総合演習Ⅰ」の授業中に臨地実習で頻回に使用する50問の漢字書き取りテストを2回実施した。その結果、1回目の正解率は平均50%であったが、2回目の正解率は90%と大幅に上昇した。1回目の漢字書き取りテスト後に解答を配布し自宅での自主学習を課したことや漢字書き取りテスト返却時に間違っ漢字のランキングや「師」や「士」の曖昧な部分が理解できるように指導を行ったことが良い結果につながったと考えられる。また、1回目の漢字書き取りテストは告知なしで行ったため、その結果で自分の漢字力に危機感を持った学生も大勢見られ、真剣に自主学習に取り組んだと思われる。

1回目と2回目の漢字書き取りテストで正解率が75%以上であった漢字9問は、授業で頻回に使用しているため学生にとっても書きなれた漢字であったので正解率が高かったと考えられる。

その一方で、1回目の漢字書き取りテストで正解率が25%以下であった漢字7問は、授業中に使用していても病院や高齢者福祉施設等で使用されている専門用語であり、日常生活においては使用頻度が低い漢字であったため十分に修得が出来ていなかったと考えられる。そのため、臨地実習前には、各分野で使用される漢字に関しては何回も練習をして間違わない訓練が必要であると考えられる。また、学生からの所感にもあったように、日頃よりパソコンや携帯電話等の機器の利用が日常化した今日では、漢字を書く作業からメール等でひらがなを入力し、予測変換する作業が主となり中学校までに学んだ常用漢字も忘れていた学生が多々見られた。わからない漢字を本や辞書で調べる作業は激変し携帯電話等での検索が主流となっている。文化庁の平成7年度「国語に関する世論調査」結果（文化庁, 1995）からも、ワープロやパソコンでの文書作成の感想として「漢字の書き方を忘れることが多くなった」という意見が多くみられている。

今回の漢字力の意識調査においても、「2年次において、マンガや雑誌を除く紙媒体の本や新聞を1日

に平均どのくらい読みましたか」の問いに対して46.6%の学生が全く読んでいないと回答があったように活字にふれる時間が不足していると考えられる。そのため、漢字を読むことよりも書くことに苦手意識が強く、誤字、脱字だけでなく、思い出せない漢字が多くあるなど日頃から漢字にふれる機会が少ないことが言語能力向上の課題と考えられる。今回の漢字書き取りテストを通して、漢字を書くことにほとんどの学生が気をつけるようになったと回答しているが、実際に誤字、脱字が減り漢字力が向上したかの問いには変化なしが17.8%おり、2回の漢字書き取りテストでは漢字力の向上の効果は限定的であると思われた。

臨地実習では見たり聞いたりした体験を実習ノートや報告書に記録するため、書字能力、形式的叙述の能力、文章校正力などの言語能力が重要となる。実習ノートの読み手である指導担当者への礼儀として「丁寧に書く」「誤字、脱字は無くす」「事実と考察を明確に区別して書く」などがあげられる。その中でも、今回は誤字・脱字を無くすことを目的に漢字力に注目し漢字書き取りテストや意識調査を通して、教育介入を行い一定の成果が見られた。しかし、実習後の実習ノートチェックにおいてもまだ誤字、脱字が見られる。特に漢字書き取りテストを行った50問以外の漢字の間違ひが多く見られ、今後の授業においても継続的に漢字力向上を目指した取り組みの必要性が明らかとなった。

「栄養総合演習Ⅰ」は臨地実習に向けた事前・事後指導にも多くの時間が必要であり、漢字だけでなく形式的叙述の能力、文章校正力の言語能力への指導も必要であり取り組むべき課題は多い。他の大学においても、「読む・考える・書く力」を育成するプログラムを展開し、より多くの授業で、より多くの内容・読み手・対象を意識した文章を書く機会をもうけるなど、学生の言語能力の向上を目指した取り組みが行われている（亀田・金久保, 2009）。

本学においても、今後は、「栄養総合演習Ⅰ」の授業だけでなく1年次や2年次の科目とも連携を図り、早期からの言語能力に関する指導が必要であることが示唆された。

参考文献

- 文化庁, 平成7年度「国語に関する論調査」http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/h07/
- 亀田千里・金久保紀子 (2009). 4年間で書く力を伸ばすには, 筑波学院大学紀要, 4 ; 205-214
- 葛城裕美・神戸絹代ら (2017). 栄養士養成施設における校外実習の指導方法の検討, 日大生活科研報, 40 ; 43-54
- 日本栄養士会・全国栄養士養成施設協会編 (2014). 臨地実習及び校外実習の実際
- 塚本真也・大橋一仁・東辻浩夫 (2007). 日本語力の徹底訓練による教育法, 工学教育, 55-1